

連体形承接の「なり」について

—竹取物語を中心に—

田 島 光 平

一 はしがき

二 この論文の結論

三 竹取物語の「なり」

四 伊勢物語・土佐日記等の「なり」

五 「(すれ)ばなり」という表現

—

活用語の連体形に接続する「なり」というのは、いうまでもなく、一般に指定の助動詞とか断定の助動詞とか言われているものである。この助動詞は、奈良時代までは体言にだけ接続して、用言に接続する例はないと考えられている。文献の上では、活用語の連体形に接続する「なり」は平安時代初期にはじめて見出されるようである。この論文は、平安時代初期にこの助動詞がどのような用い方をされていたか、ということについての調査報告である。

この助動詞は、研究対象としてはたいへん不遇な取扱いを受けているように思う。前述の、接続の面と、いつ現われたかということ以上に深い関心が払われていないようである。一つには、これは、古典文法の研究が古典の解釈と結びついてなされることが多く、現

代語に正しく言い換えられれば、それ以上の深い関心を呼ぶことが少いといった事情によるものかと思う。あゆひ抄にこの「なり」について「里に『チャ』また『デアル』など言へり。靡を受けては『ノデアル』『ノチャ』など里す。」と述べているように、連体形を受ける「なり」は「ノダ」「ノデアル」と口語訳すれば、それで万事が解決してしまうのであり、それ以上の追求は不要な感じがする、こういう事情があるかと思う。しかし、では現代語の「ノダ」「ノデアル」はどういう働きをしているのかという問題になると、どうもはっきり分っていないようである。

数年前、終止形に接続する「なり」については華々しく論ぜられたことがあったが、それと比較され、引き合いに出された連体形接続の「なり」については深く触れた論文はなかったように思う。この二つを比較して研究されたある論文には「連体形接続の場合には殊更に顕著な現象を認定するに至らない。」と書かれている(註二)。しかし、吾々の見る所、顕著な現象が認定されるように思うのである。

なお、この論文は昭和三十七年秋の国語学会研究発表会で発表されたものに筆を加えたものである。

二

はじめにこの論文の結論を挙げることにする。

(一) 平安時代初期の連体形承接の「なり」は、その連体形が体言的に用いられる場合を除いては、根拠をもって(明示または暗示)相手(聞き手または読者)に説明する場合に用いられる辞であった。

(イ) 「おとには聞けどいまだ見ぬ(モノ)なり」(竹取物語)

(ロ) 「竜を殺さんと求め給へばあるなり」(竹取物語)

「ものうたがしさに、よめるなるべし」(伊勢物語)

「男もするなる日記といふものを女もしてみむとて、するなり」

(土佐日記)

(ハ) 「かぐや姫てふ大盗人の奴が人を殺さんとするなりけり」(竹取物語)

取物語)

「諸仏は体皆同(じき)なり」(西大寺本金光明最勝王経古占)

ここに平安時代初期と記したが、これは勿論厳密ではない。引例に用いた比較的初期の四つの資料に現われた用法という程度に理解されたい。

(ニ) (一)の用法から、根拠と事実を逆に置くことよって、根拠を直接に述べる「——(すれ)ばなり」などの形式が現われた。

○都へと思ふを物の悲しきは、かへらぬ人のあればなりけり(土佐日記)

○この人うたよまむと思ふ心ありてなりけり(土佐日記)

○「方便をモチテ身骨を留(めたま)へルことは、諸の衆生を益(せむ)が為になりけり」(最勝王経)

○「一切の処に鏡智現前するをモチテなり」(最勝王経)

三

まず結論(一)について述べたい。ここでは竹取物語について考察する。これには他の資料に見られない豊富多彩な用例が得られるからである。しかし、これは国語資料としては信憑性が少ないのであるから、次項において、伊勢物語・土佐日記・古訓点本によって補強したいと思う。

さて、竹取の用例を選び出すわけであるが、接続面から見て、終止形接続の「なり」と判別できない例がかなりある。そこで、終止形接続の「なり」の研究成果を援用して、「なり」の接続する用言の主語が一人称であると考えられるもの、及び、接続する用言の表わす事実を話し手または書き手が目撃していると考えられるもの、この二項に該当するものは、連体形承接の「なり」と考えて取り入れることにする。そうすると、次に掲げる表の十七例を選び出すことができる。

この表の十七例の用例と下に記した注記とを合わせ見ていくと、ここから次の四つのはっきりした特徴が指摘できる。

第一の特徴は、会話文・手紙文にだけ用いられて、地の文に用いられることがない、ということである。(実は地の文の中にも三例、連体形承接の「なり」と思われるものがあるが、前述の方法でははいて来ない。これについてはあとで触れる。)

第二は、会話・手紙の当事者を見るに、主として、上位者から下位者へという関係が窺われる、という点である。(例外についてはあとで触れる。)

竹取物語における連体形承接の「なり」の用例

番号	ページ	用例	会話文・手紙文の別	話し手	聞き手	用法	備考
1	39	の給ひしに違はましかばと、この花ををりてまうできたるなり。	会話	くらもちの皇子	翁	根扱	主語一人称
2	40	御つかひとおはしますべきかくや姫の要じ給ふべきなりけり。	手紙	匠	翁(姫翁)	体言後	
3	40	給はるべきなり。	会話	匠	翁	根扱 <small>背</small>	
4	42	おとには聞けどいまだ見ぬなり。	手紙	わうけい	あべ右大臣	体言的	
5	44	この皮は唐にもなかりけるを、からうじて水求め尋ねえたるなり。	会話	右大臣	翁	体言的	主語一人称
6	47	竜を殺さんと求め給へばあるなり。	手紙	右大臣	翁	体言的	主語一人称
7	47	はやても竜の吹かするなり。	手紙	右大臣	翁	体言的	主語一人称
8	49	かくや姫てふ大盗人の奴が人を殺さんとするなりけり。	手紙	大伴	從者	根扱 <small>背</small>	
9	52	悪しく探ればなきなり。	手紙	大伴	從者	根扱 <small>背</small>	
10	52	されど子安員をふと握りもたればうれしくおほゆるなり。	手紙	石上中納言	從者	根扱	
11	59	かならず心惑ひし給はん物ぞと思ひて、いままで過し侍りつるなり。	手紙	姫	翁	根扱	主語一人称
12	60	さらずまかりぬべければ、思しなげかんが悲しき事をこの春より思ひなげき侍るなり。	手紙	姫	翁	根扱	主語一人称
13	62	あの国の人を、え戦はぬなり。	手紙	姫	翁	根扱 <small>背</small>	
14	62	長き契のなかりければ、程なく罷りぬべきなめりと思ふが……	手紙	姫	翁	根扱	
15	62	程なく罷りぬべきなめりと思ふが、悲しく侍るなり。	手紙	姫	翁	根扱	主語一人称
16	62	み心をのみ惑はして去りなむことの、悲しく耐へがたく侍るなり。	手紙	姫	翁	根扱	
17	63	かくや姫は、罪をつくり給へりければ、かく賤しきおのれがもとに、しばしおはしつるなり。	手紙	天人の王	翁	根扱	

第三は、この「なり」は文の末尾にのみ用いられて、接続語的な用法がない、という点である。

第四は、疑問文・詠歎文・命令文などには用いられないという点である。

以上四つの特徴が指摘できるのであるが、これは竹取の十七例だけから得られた特徴であって、「なり」についての結論ではない。これを手がかりにして「なり」の用法を考えていきたいと思うのである。

まず、第一の会話文・手紙文にのみ用いられるという点を考えてみる。最初に手紙文の例④を考えてみよう。

おとには聞けども、いまだ見ぬなり。

この本文に対しては「いまだ見ぬ物なり」となっている異本二つが存在する(註三)。さらにこの文脈をたどるに、この文は「火鼠の皮衣、此国になき物也。」につづき、更に「世にあるものならば」「なき物ならば」という表現が続くのである。異本ならびにこの用いざまから見るに、この「見ぬなり」は、「見ぬ物なり」が原本の姿であるかどうかは問題外としても、「見ぬ」が体言的用法として「見ぬ(モノ)」の意に用いられたと見るのが自然であろう。この用法を認めると、②の手紙文も「(玉ノ)枝ハ……かくや姫の要じ給ふべき(モノ)なりけり。」と見るのが自然であり、また⑤の会話文の例も「この皮は」の結びと見ることができ、「求め尋ねたる(モノ)なり」の意に解することができる。このように「なり」の承接する連体形が体言的に用いられる用例の存在をまず確認しておく。上述の三例を除いたあとの十四例はすべて会話文である。

ではどのような会話文か。さきに第四の特徴として挙げたように

疑問文・詠歎文・命令文には用いられないのであるから、大雑把に言って説明文であると言ってよからうと思う。ではどのような説明文か。そこで第二の特徴として挙げた、上位者から下位者へという関係が窺われるということについて考えてみたい。まず、上位者から下位者への関係としては例外と思われるものについて考えてみる。楳取から大伴大納言に言っている例が二例ある。実はここは大納言の一行が暴風に会って「船に乗りては、楳取の申すことをこそ、高き山と頼め」と言っている場合であって、楳取の方が心理的に上位にあると見られる。また、かくや姫が翁に言う例が六例もあるが、これは大話の「かくや姫昇天」の段であって、ここでかくや姫は「月の都の人」であることを明らかにしているのであって、やはり姫を上位者と見るのが妥当であろう。ではどうして上位者下位者の関係が見られるのか。

用例を見て、まず注意されるのは、何か根拠を挙げて説明するという例が非常に多いことである。十四例中十例までがそれである。⑨の例を取って見よう。

あしくさぐればなきなり。

これは子安貝の話である。石上中納言は従者から「貝がない」という報告を受けて、「あしくさぐればなきなり」と立腹したというのである。これを考えてみるに、子安貝の「ない」ということは分っていることであるから、中納言の言いたいのは「悪しく探れば」という「ないこと」の理由・根拠である。これは「なきはあしくさぐればなり。」と言うのと内容としては同じことを言っている。従ってこの「なり」はある事柄の根拠に対する断定を示す語として働いている。これは

吹くからに秋の草木のしをるれば、むべ山風をあらしといふらむ。(古今集・秋下)

の「らむ」が原因・理由に対する推量を示すといわれるのと対応すべき用法である。この推量に対して断定なのである。このような「なり」が会話文に用いられると、確信のある、権威をもった説明・説得ということになる。上位者から下位者へということも、こういうことの結果現われたことだろうと考えられる。

ここで根拠の明示されている例十例について、その根拠の示し方を見るに、六例が「已然形十ば」によって示されている。残り四例について説明する。⑩の例は「——思ひて、」までが根拠になっており、「て」によってそれが示されている。「て」の理由を示す用法は一般的である。①の例は「——違はましかばと、」までが根拠になる(註三)。この「と」は「と(思ヒテ)」の意に解すべきものであって⑪と同型である。⑫⑬の例はやゝ異例である。⑭の例でいうと「——思ふが」までが「悲しく侍る」の主語の形になっているのである。しかし、述語の形容詞が主観的な感情を示す場合には、その主語はその形容詞の示す感情の根拠になるということは一般的なことである(註四)。⑮も同型である。

あと残された四例についてみるに、ここには根拠が明示されていないけれども、「私がこう言うのは根拠があつて言っているんだぞ」という気持が文脈から窺えるのである。③の例で「給はるべきなり」というのがあるが、玉の枝を作つた匠たちが、翁に対し、当然報酬をこちらから貰うべきだ、という手紙を差し出して、そのあとでこう言っているのである。これは「報酬ハコチラカゴ給はるべき(モノ)なり」と解されないこともないが、語気強く要求す

ることばとしては適切ではない。やはりここは、既に差し出してある手紙を受けたもので「カカル次第ナレバ、給はるべきなり」と場面上から相互に理解されている根拠を背後に持つてのことばと解したい。「なり」はこの背後の根拠に対応するものと考えるべきであろう。⑦の例「はやても竜の吹かするなり」についても同じことが言える。これは楳取のことで、波風激しい上に、雷まで落ちかかることについて「竜を殺さんと求め給へばあるなり」と言うあとにすぐ続くのであって、「竜を殺さんと求め給へば」という根拠が、ここにも続いているのである。③の例「かぐや姫てふ大盗人の奴が、人を殺さんとするなりけり」について考えてみる。これは竜の頸の玉を取るのに失敗し、重病人となって帰り着いた大納言が従者に言ふ(註五)。「竜を捕えたらましかば、又こともなく、我は害せられなまし」ということばに続くのであって、「(かぐや姫がその竜を捕えにやらせたのだから)……人を殺さんとするなりけり」となる文脈で、このような根拠が隠されているのである。最後に⑩の例「あの国の人を、え戦はぬなり。」について言えば、ここには文脈上から、根拠になることばは想定できない。しかし、かぐや姫は天人の超人的な威力というものは知悉しているのであって、そういう根拠の上に立って、権威のある発言をしているのだと考えることができよう。

以上竹取物語の十七例について考えてみた。結局、連体形の体言の用法と見られる三例を除くと、この連体形承接の「なり」は、ある事柄の根拠に対応するものであって、根拠を以て相手に説明し、あるいは説得しようとする言語主体の語気を示すものだということができようと思う。従つて、さきの竹取の「なり」の第三の特徴と

して挙げた、文末にのみ用いられるということも当然のことと考えられるのである。このような用法を持つ「なり」は「断定の助動詞」という名称こそふさわしいけれども、体言承接の「なり」とは少しく性質を異にするものであって、むしろ、時枝博士の言われる「対人関係を構成する助動詞」に近いものと言わなければならぬ。

次に地の文の例に触れる。ここに取上げようとするのは、次の三例である。

御子の御供にかくし給はんとて、年頃見え給はざりけるなりけり
(日本古典文学大系本四一ペ)。

御髪もたげて、御手をひろげ給へるに、燕のまりにおけるふる
糞を握り給へるなりけり(五二二ペ)。

貝をばえ取らずなりにけるよりも、人の聞き笑はんことを日に
そへて思ひ給ひければ、たゞ病み死ぬるよりも、人聞き恥づかし
くおほえ給ふなりけり(五三三ペ)。

ここで、この「なり」が連体承接かどうかに一応の問題はあろうが、「なりけり」となるのは連体形承接の「なり」と推定できるといふ調査結果も出されているし(註五)、文脈から考えても、そのように見るのが妥当であろう。この例を見るに、三例共に根拠が明示されている(註六)。この点はさきの結論に支障を来たさくない。しかし物語の地の文ということ、相手に対する説明ということとどう結びつくかが問題である。この問題を考えるには竹取物語の文章構造とか(註七)、物語の起源・本質といった大きな問題に関連を持って来る。従ってここであまり断定的なことは言えないが、次のようなことは言い得ると思うのである。竹取物語は、物語の事実を客観的に述べるといふ面が多いのであるが、この三例はあきらかに作者

の主観的な判断とか説明とかを述べているのである。それまでずつと客観的に「お話」を述べて来た作者が、ここで読者の方に顔を向けて「いま私が言ったのは、こういうわけだったのですよ」と語りかけるという場面が想定されるのである。もし竹取物語が語り物であったとすれば、相手は聞き手ということになるのである。このように考えれば、この地の文の例にも、さきの結論は妥当するのである。

四

竹取物語を資料にして一応の結論を得たのであるが、もともとこの作品は、平安初期の国語資料としては信憑性の少ないものである。他の諸資料によって検証され、支持されない限り、この結論は有効性を持たないであろう。そこで、伊勢物語・土佐日記・古訓点本の一つについてこのことを行いたいと思う。

伊勢物語(日本古典文学大系本による)について、竹取物語で行った方法で連体形承接の「なり」を求める時、たゞ一例を見出すにすぎない。しかし、小松登美氏の立てられた原則(註八)に従う時、更に三例をこれに加えることができる(和歌については一応除外する)。この四例を見るに、会話文一例、地の文三例となっている。会話の一例は、

昔、「忘れぬるなめり」と問言しける女のもとに、(三十六段)とあって和歌一首が述べられている最も短い話に現われている。これだけの文から「なり」の用法を説明することには勇気を要する。しかし、「忘れぬめり」との間には相違があるはずで、それを「なり」の機能として説明しようとするれば、背後に根拠をもつての表現

ということが最も妥当するであろう。訪問も消息も久しく跡絶えて
いる、その根拠の上に立つて、この表現は生まれたものと解した
い。地の文に用いられているのは次の三例である。

(イ) それをかく鬼とはいふなりけり。(六段)

(ロ) おもなくていへるなるべし。(三十四段)

(ハ) ものうたがはしさによめるなりけり。(四十二段)

先ず地の文に用いられているという点を考えるに、これらは共に、
話のあとに述べられた作者の解説とか感想に当る部分である。これ
は後人の補入とする説もあるほど異質なものである。これは明らか
に読者に対する語りかけと見るべきものであって、竹取の地の文の
説明がここにもあてはまる。次に根拠の点から考えるに、(イ)には
それが明示されているから問題はない。(ロ)について少しく述べる。
これは例の芥川の話で、女が鬼に食われたと語ったあとで、実は女
は兄達によって連れ去られたのだと説明して、ここに続くのであ
る。この文は、従って、このことを背後に根拠として含んで、鬼と
言ったのは実はこういう次第だったのだと説明している文なのであ
る。

次に土佐日記に移る。ここでは八例を挙げる事ができる。この
うち会話文は一例であって、あとはすべて地の文である。ここで問
題になるのは土佐日記の地の文が相手を予想した文かということであ
る。土佐日記が備忘的な記録ではなくて、文学作品として公表を
意図したものであることは諸家の認めるところである。しかも、客
観的な事実の記載だけでなしに、主観的な感想をも述べているので
あるから、これを公表の意図を以って述べるという時には、作者の
中に読者と相対しているという心理的な場面ができていっていると考

えられるのである。このことは有名な冒頭の一句がよく示してい
ると思う。

をとこもすなる日記といふものを、をむなもしてみんと、する
なり。

これは述作の意図について、強く言えば宣言、弱く言えばことわり
を述べたものである。これが読者に訴えかけた文であることは明ら
かである。さて、ここで「なり」になるが、作者は、日記を書く
についての根拠をこの「なり」によって説明しているのである。そ
の根拠は「——してみんとて」であって、私が「する」即ちこの日
記を書くのは、こう思つてであるのだと言つているのである。

このように、土佐日記が読者を予想した作品だということが認め
られれば、あとはあまり問題はないように思う。八例中六例に「已
然形十ば」「て」などによって根拠が明示されている。根拠の明示
のないのは次の二例である。

(イ) きくされにきけるなり。(一月十七日)

(ロ) 家に預けたりつる人の心もあれたるなりけり。(二月十六
日)

(イ) については語義に不明な点もあり成案を得ていない。一応保留す
ることとする。(ロ)は荒廢した家の有様を述べたあとに来る記述で、
「このように荒れたのを見れば」という根拠を背後に持った説明と
見るべきであろう。

次に、春日政治博士の訓まれた「西大寺本金光明最勝王経古点」
を見ることにする。ここには数多くの連体形承接の「なり」を見出
すことができる。数例を挙げる。

諸仏は体皆同(じき)なり。(一三ノ二二、婆羅門↓喜見童子)

有ルいは化身にも非ず亦は応身にも非なり。(二六ノ六、仏菩薩摩訶薩)

一切の禪と定と首楞嚴の等なり。(二七ノ六、〃)

諸の衆生をして三宝を帰敬して皆願して菩提の行を修習せむルなり。(三二ノ二、虚空藏菩薩↓仏)

調査が粗雑で、厳密とは言えないが、ここに用いられた「なり」には、ほゞ次のような特徴が見出される。一つは会話文に用いられるということ、二は説明文の文末にのみ用いられるということである。会話の当事者を見るに、上位者から下位者へという例が多いがこれには例外もある。たゞ竹取の例に見られたような根拠を明示する語はほとんど見出されない。思うにこれは、仏者の問答の形式によるもので、その説示は深い確信に基づいてなされ、根拠づけといったものを要さなかつたのであろう。「なり」はすべて乎已止点によって示され原文にはないものである。加點者は、これらを深い根拠を背後に持った発言と認め、「なり」を加點したものであろうと想像されるのである。春日博士はこの「なり」を文尾の感動語とされ、一種の強調表現だと説いておられるが(研究篇二〇二頁)、それは、このような認識の上に立っての説であらうと推測されるのである。

五

以上、竹取物語から得られた結論を踏まえて、他の諸資料にその適用を試みた。そして、これは、ほゞ妥当性を持つと結論し得ると思うのである。

次に、結論(一)の、「なり」が根拠を示す語に直かに接する形にっ

いて述べる。

土佐日記に次のような「なり」の例がある。

(イ) 都へとおもふをものかなしきは、かへらぬ人のあればなりけり。(十二月廿七日)

(ロ) この人歌詠まむと思ふ心ありてなりけり。(二月七日)

これらの「なり」は共に接続助詞を承けているもので、接続から見ると、異様の感があるのである。しかし、「……あれば」及び「……心ありて」が竹取物語などの多くの例で見たように、根拠を示すことばであることを考えれば、こうした表現の出現も容易に理解できるのである。(イ)の例は「かへらぬ人のあれば、都へとおもふものかなしきなりけり」と表現内容としては等しいのである。そしてこれが、前述のように連体形承接の「なり」の典型的な用法であった。しかも「なり」は根拠に呼応するものであって、根拠と「なり」とが直かに接する時、即ち根拠と事柄が逆に置かれる時、(イ)のような表現を生むことは当然であらう。(ロ)は根拠のみ表現されて、事柄が背後に押しやられてしまった例である。「(この人の来れるは)歌詠まむと思ふ心ありてなりけり」となるべきところである。

指定の助動詞について説く者、多くこのような接続助詞に接する用法に触れていない。また触れる者も「――ば」「――て」までを体言と同じ資格を持って用いられているのだと説いている。しかし、体言と同じ資格というだけでは、こうした表現に密着した理解とは言えない。「なり」と根拠との結びつきから生じた表現と考えるべきであらう。

このような表現は、古訓点本には数多く見出されるようである。春日博士の訓まれた「最勝王経古点」には次のような例がある。

人の為に解説して謗毀を生(さ)ず〔不〕アラ令メむと欲(ひ)てなり。(九ノ七)

無上菩提を成弁セシむルをモチテなり。(十二ノ七)

常なりと見ルに由ルが故になり。(九ノ一六)

方便をモチテ身骨を留(めたま)へルことは、諸の衆生を益

(せむ)が為になりケリ。(十四ノ四)

春日博士はこの「故になり」「為になり」の形に不審を持たれ、「故なり」の形がないではないが「これらは偶々点を誤り落したかと思はれるほど、極めて少い」(研究篇二七四ペ)と述べられ、「元来接統形をユエニ・タメニとすれば、叙述形はユエナリ・タメナリとする方が妥当なのであるから、ユエナリ・タメナリは一種の訛った形と見なくてはならないが、少くも此の時代の漢文訓詁には用ゐられた形であると認めなくてはならない。」(二七五ペ)と述べておられる。しかしながら「已然形十ば」や「連用形十て」のような接続語に「なり」が接しているように、むしろ接続形に接した「故になり」「為になり」が本来の形であったと考えるべきではなからうか。

願自在を以(て)の故に、縁に随(ひ)て利益(し)たまふゾ。
(二六ノ八)

これは「ぞ」の例であるが、「——故に」までが根拠を示すのであって、これと「なり」とが結びつく時、「故になり」という形が生まれるのである。

この「なり」と連体形承接の「なり」との出現の前後関係は資料の面からは明らかになし得ない。しかしながら、連体形承接の「なり」が、古くからあった「ものなり」の「もの」の形式化による脱

落から生じたこと、その「なり」が多く根拠に呼応して用いられたということを考えれば、これが更に発展して、「なり」が根拠に密着する用法を生じたことと推定することに、合理性がありそうである。

(注一) 塚原鉄雄氏「活用語に接続する助動詞へなり」の生態的研究(『国語国文三四・七』)

(注二) 古活字版十行本(山田忠雄氏・竹取物語総索引底本)、吉

田本(『日本古典文学大系本頭注』)

(注三) この部分の解釈には諸説があるが、日本古典文学大系本の次の解に従った。「おっしゃったのに違っていたらいけないが、(これでも違っていないのだからよからう)と思つて。」

(注四) 口語でも「母が死んだのが悲しいのです。」というふう

に言われる。
(注五) 小松登美氏「土佐日記の解釈と文法上の問題点」(講座解

釈と文法4、明治書院)

(注六) 「御髪もたげて……」の例は論理的な意味では原因や目的を示す根拠とは言えない。しかし「手をひろげたところが、(その結果として)古糞を握っていたということが分つた」というのであって、ことばは適切でないかも知れぬが、場面的根拠と言えるであろう。

(注七) 竹取物語の文章構造について阪倉篤義氏は「非訓読文的性格の文章が、訓読文的性格の文章を包むという形をもって、この物語の文章は構成せられている。」(『日本古典文学大系本解説』)と述べられているが、この地の文の三例は非

誹詠文的文章（語り物的文章）の中にあるのである。

（注八） 注五に注記した論文の中で「推量の助動詞類へは『連体なり』が接続する」という原則を立てられている。

（附記） この論文は昭和三十七年度文部省科学研究費交付金（奨励研究）による研究の一部である。

——静岡県立島田高等学校教諭——